

スペイン語では $v > b$ という変化が起こり、 v がなくなった。(綴りの上では v を保っていても発音は $[b]$ である。)

2.4.2 分裂 split

ラテン語の $[k]$ は、イタリア語で後舌母音の前では $[k]$ のままであったが、前舌母音の前では $[tʃ]$ となった。中英語の $/u/$ は $/ə/$ と $/u/$ に分裂し、 run $[rɛn]$ と put $[pʊt]$ のような違いができた。モンゴル系のブリヤド(ブリヤート)語では s が音節頭で h に、音節末で d に変わり、 $sara > hara$ (月)、 $ulus > ulad$ (国) のように変化した。

3 形態変化 morphological change

3.1 類推 analogy

共通語において「見る・食べる」などの1段動詞(母音語幹動詞)と不規則動詞「来る」は、受身形も可能形も「見られる・食べられる」、「来られる」で、同じ形である。それに対して、「取る・切る」などの5段動詞(子音語幹動詞)は、受身形は「取られる・切られる」、可能形は「取れる・切れる」と区別される。それらからの類推で1段動詞の一部と不規則動詞「来る」に「見れる・食べれる」、「来れる」といった新たな可能形が生まれてきている。本来 $mi-$ 、 $tabe-$ に $rare-ru$ の付いた $mi-rare-ru$ 、 $tabe-$

$rare-ru$ が³、 $tor-are-ru$ 、 $kir-are-ru$ (受身) と $tor-e-ru$ 、 $kir-e-ru$ (可能) からの類推で $mir-are-ru$ 、 $taber-are-ru$ のように解釈されて、そこから $mir-e-ru$ 、 $taber-e-ru$ が作られたのである。

また、「見せて(くれ)！」というところを「見して!」と言うことがよくあるが、それも類推と考えられる。たとえば、5段動詞の使役形には「やらせる・書かせる」のほかに、使用は限られるが「やらす・書かす」のような形も持つものがある。それらのテ形はそれぞれ「やらせて・書かせて」と「やらして・書かして」である。「見せる」のテ形は「見せて」であるので、「やらせて・やらして」、「書かせて・書かして」などからの類推によって「見せて」から「見して」が作られたと考えられる。

現代英語の $help$ (助ける) に当たる語は古英語で $helpan$ 、 $healp$ 、 $holpen$ という形を持っていたが、規則変化の動詞からの類推でそれが現代英語では $help$ 、 $helped$ 、 $helped$ となった。

ラテン語で「労働」を意味する語は s が母音間で r に変わった。その結果、次の表に示すように $labōsem > labōrem$ 、 $labōsis > labōris$ という形ができ(段階2)、最終的に母音間でない s も r になって $labos > labor$ という形ができた(段階3)。

	段階1	→	段階2	→	段階3
単数主格(〜が)	labos		labos		labor
単数対格(〜を)	labōsem		labōrem		labōrem
単数属格(〜の)	labōsis		labōris		labōris

3.2 異分析 metanalysis

語が本来の切れ目とは異なったところで切られ、その結果新しい語形が生まれることを異分析という。英語の $nickname$ (ニックネーム) はもともとは $ekename$ であったが³、 $an\ ekename$ が $a\ nekename$ (a

表1

	5段動詞	1段動詞	
		本来の形	新しく生れた形
受身形	$tor-are-ru$	$mi-rare-ru$	→ $mir-are-ru$
可能形	$tor-e-ru$	$mi-rare-ru$	$mir-e-ru$